

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	夫不在時の不安により眠剤を乱用してしまう高齢女性患者に対して健康食品（ビール酵母）を使用した 1 症例
演者名	奥野滋子 1)、森谷記代子 1)、松本万紀子 1) 栢沼 牧 2)、宮澤正幸 1)、水嶋しのぶ 3)
所属	1) 医療法人社団若林会 湘南中央病院 2) わかば訪問看護ステーション 3) 順天堂大学医学部附属順天堂医院

目的

夫の不在時に眠剤を乱用する高齢女性に対し身体の安全と良眠の提供を目的とし、夫からの希望で眠剤と称してビール酵母を頓用で使用した。偽薬使用の倫理的問題と精神症状に対する薬剤の安易な処方の問題点を検証する。

実践内容

86 歳女性。糖尿病、陈旧性脳梗塞。要介護 3。内縁の夫と二人暮らし。夫は出張が多く夜間も留守がちである。不眠が続き眠剤を処方したが乱用を認め、「夫が浮気している」などの不穏言動も出現した。訪問看護師やヘルパーの情報から、精神症状は夫不在の時に顕著となることが判明した。内縁関係、孤独感の増強、老後の生活や病気に対する不安が様々な精神症状の原因である可能性が示唆された。そこで半年後の夫の定年までの対応を検討したところ、夫よりラムネ菓子、整腸薬、ビール酵母などを眠剤と称して飲ませてはどうかという提案があった。夫の出張を数日後に控え早急な対応が必要であったこともあり、自宅にあったビール酵母を 1 錠ずつ分包化し、薬袋には「不眠時」と印字して屯用使用とした。偽薬使用にあたってはスタッフ（医師・看護師・薬剤師）で倫理シートを用いて倫理的問題の評価を行い、ケアマネに方針を伝達した。夫には偽薬が本人の尊厳に関わる問題であること、本人が求めれば真実を伝えること、一時的な処置であること、他の対処方法については継続して検討することを伝えた。

実践効果

夫から内服を勧め、一晩に 1～2 錠を内服し入眠可能となった。現在は夫が常時在宿しており、不穏・不眠は認めず穏やかに過ごしている。

考察

偽薬使用に関して本人の尊厳が問われる症例であったが、過剰な服薬による危険からの回避、不安・不眠への対応、患者の理解力が十分でなく意思決定が困難、ビール酵母自体の無危害性、夫の生活にも利があると判断した。在宅医療における倫理審査システム構築の必要性、服薬状況の評価の重要性、単なる対症療法ではなく原因探索の大切さを再認識した。